

問題と解の先入見

大工塾の扉を叩く大工さんは多くの疑問を抱えているはずです。

そんな状況を、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（1925～1995）は、「差異と反復」の中で、次のように表現しています・

『すべてのひとが知っていることがらをうまく知ることができず、すべてのひとが承認しているとみなされていることがらを遠慮がちに否定する者が、たとえ一人だけであっても、しかるべき慎ましきをもって存在しているのである。』

自分が建てている住宅が本当にこれで良いのだろうか？親方や先輩から「こうしないさい」と言われることが本当にそれで良いのだろうか？法律の規定が本当に住宅のためになっているのだろうか？自身がめざす方向性はこれでいいのだろうか？等々ひそかに多くの解けない問題を抱えている大工は、ドゥルーズの言う「慎ましきをもって存在している」ひとのように感じます。そんな疑問の解答を探しに、大工塾に参加するのだろうと思います。

では、そんな疑問の解答は見つかるのだろうか。大工塾には本当に解答があるのだろうか。

結論から言ってしまうえば、解答などないのです。問題（疑問）にはかならず解答があるという「問題と解のセット」という考え方は、実は先入見なのだどドゥルーズは続けます。

『わたしたちは、問題とは、前もって与えられる一定のすっかりできあがったものだと、そして、答えもしくは解の中で消失するものだと信じ込まされている。』

『問題を出すのは先生であって、わたしたちの仕事はそれを解くことであり、この仕事の結果は、ひとつの強大な権威によって真あるいは偽りという質が付与される』。最後には、先生が解答を教えてくれる、という先入見。

これは、長い学生時代に教え込まれたひとつの前提であり、私たちが考えるときに自然に前提にしていることです。しかし、これは、ものづくりに適用できる前提ではないのです。現場の具体的世界では、ひとつ疑問が解けたと思った瞬間に、次の疑問が生じてくるのです。追求すればするほど、疑問は解消されるどころか次々に現れてくるのです。それは、やり方が悪いのではなく、どこかに解答があり、それを探せばすべてが解消するという考え方が問題なのだどドゥルーズは言うのです。

本当は、疑問そのものが重要なのであって、疑問を立てることのなかで解が生じてくるのです。もしも世界に一つの解が存在しているならば、ひとには創造の場など残されていないことになるではありませんか。

学ぶと知ることの違い

『学ぶとは、問題という対象性に直面して遂行される主観的な行為にあてはまる名称である。それに対して、知るとは、概念の一般性、あるいは解決の規則の平穏な所有だけを指示している。』

学ぶとは、一般的な知識から具体的な知識にいたることではなくて、具体的な問題（疑問）の中に分け入って解を探し出す行為にほかならないのです。解を与えられたとしても、その解は一般性であって具体的に生きるための解ではないのです。ただ所有すること、それは知ることであって、学ぶことではないのです。学ぶとは、現実の疑問の中にしかなく、自ら探しに行くほかありません。

『「私と同じようにやれ」と言う者からは、何も学ぶことはない。私たちにとっての唯一の教師は、わたしたちに対して「私と共にやりなさい」と言う者であり、この教師は、わたしたちに再生するべき所作を提示するかわりに、異質なもののなかで展開するべきいくつかの「しるし（シーニュ）」を発することのできる者なのである。』

学ぶとは、しるしを見つける主体的な行為にほかならないのです。

なぜ、渡り腮構法なのか

大工塾では、私と山辺豊彦さんとで考えてきた渡り腮構法という具体的な構法を題材にして講義を組み立てています。なぜ、特異な構法を題材として講義を組み立てるのか、もっと広い知見について講義すべきではないのか、という意見もあるかと思います。それは、私たちが大工塾を知る場ではなく、学ぶ場にしたいと考えているからです。実際に住宅を設計して建てる、そのつくり手として学びたいと考えているからです。ドゥルーズが教師と呼ぶ人のように、自分と同じにやれというのではなく、具体的な構法の詳細な解析の中から、自らの独自の展開のヒント（しるし＝シーニュ）を見つけてもらいたいと考えているからです。だから、渡り腮構法は解として用意されているものではないのです。疑問のなかに分け入ってゆく人のみが、ひとつの解に到り、さらに次の解へ向かって進むことができるのです。

※引用『』はすべて、河出文庫「差異と反復」ジル・ドゥルーズ 財津理 訳